

## 上限価格方式の運用に関する研究会（第4回） 議事概要

1. 日時：令和5年5月10日（水）15:00～15:33
2. 場所：オンライン会議
3. 出席者
  - (1) 構成員（五十音順、敬称略）

伊藤 成康、関口 博正、辻 正次（座長）、長田 三紀、中村 彰宏、山内 弘隆（座長代理）
  - (2) 総務省  
木村 電気通信事業部長、片桐 料金サービス課長、寺本 料金サービス課企画官、  
浅川 料金サービス課課長補佐
  - (3) オブザーバー  
東日本電信電話株式会社、西日本電信電話株式会社
4. 議題
  - (1) X値の扱い
  - (2) その他

### < X値の扱い >

（事務局から資料1について説明）

#### 【辻座長】

これまでの議論を踏まえて、6ページでX値についての方向性とまとめていただきました。もう1点の新たな算定方法を検討するかどうかにつきましては、多くの構成員の皆さんは特段に新しい推定は要らないような御意見だと思しますので、それはそれで私は良いかと思えます。残ります問題はX値についてでありますけれども、ここの方向性案で出ておりますので、今日はこの点につきまして改めて構成員の皆さんの御質問、御意見等をお伺いしたいと思います。

#### 【中村構成員】

今回のX値の話については、IPマイグレーションの時期の過渡期の話だと理解しております。前回も私自身は案②、ないしは案①と案②の間が良いかと考えて発言をさせていただきました。一方で他の先生、特に伊藤先生のおっしゃったお話、X値の計算を再度せ

よというよりは、X値を決めるに当たっては理論的な根拠があってしかるべきだと、その中でFinsinger、Vogelsangの議論などもあったように記憶しております。

もちろん、公の政策なのだからしっかりした根拠があって決める、何かしらきちんと説明ができるようにしておくべきだという話だと理解しておりました。その意味では今日、事務局から御説明があったX値を推計しておこう、あるいはそのX値の計算の方法として何か簡素化するような方法がないかというような話については、私も同感であります。ただX値、やはり計算するのに非常に大きな労力がかかって、その中で根拠となるデータ自体が推計に推計を重ねたものになって非常に心もとないというのは、今日の事務局の説明にもあったとうりかと思っております。

そういう意味で何か簡素化のアイデアがないかと考えた場合に、例えばX値の推計というやや強引な言葉遣いになるかとは思いますが、様々な環境が変化していないことが言えるのであれば、過去のX値を使うのも一つの推計の方法としては考えられるのかと思っております。

例えば前回のものというのは、いろいろな経済動向を加味して0.1というお話でしたが、その前のものは0.2ということで使っております。何か定性的な根拠でX値に変化を与えるような、X値がプラスになるような変化をおこしそうな構造的な変化があるのかということを何かしら定性的に議論して、そういうものがなければ以前のものを、過去のX値を情報として使っていくのも一つあるのかと少し考えた次第です。

実際こちら、提案の案①から④とあった中の提案の案④のX値の算定の仕方というのは、案①と②の間というよりは例えばCPI上昇率のうちに、例えば何%、例えば10%とか、5%とか、1%とか、CPIが上昇している今の局面で考えると、その中の少しは生産性上昇で値上げを抑制してくださいという考え方のように見えます。それというのはプライスカップというインセンティブ規制の趣旨と合致しているのかと思っていて、その中でCPIが大きく上昇している今の状況で、前回と同じぐらいの生産性向上を目指してくださいというのは、インセンティブ規制であるプライスカップの趣旨にも論理的にはかなうものかと考えました。

#### 【辻座長】

結論から言うと、過去のX値を参考にして、離れ過ぎますとデータが全て変わりますからまずいですが、直前の前回の令和3年のものを使ったらどうかという御提言と思いません。

**【中村構成員】**

おっしゃるとおりです。

**【辻座長】**

大変検証に値する議論の一つのポイントかと思います。

今の御意見でX値というか、生産性上昇見込率は前回のを引き継ぐのはよく分かります。ただ、インフレ率が前はまだデフレ期だったこと、新型コロナにはなっていたと思います。今回は例の3%以上のCPIの上昇がありますので、おっしゃった生産性向上見込率はいろいろなデータを用いて算定しますから、それが少し難しいとなったら期間が短いということと、あるいは大きな事業者の中でコストダウンとかアップの要因がなければそれでいいと思います。このインフレ率のギャップが前回と今回とは少し異なるので、それをどちらとするかというのが一つ論点になるかという気がいたします。

**【関口構成員】**

基本的にはこの6ページにある方向性案に私は賛成をしておりますし、先生方の御意見につきましても、前の5ページでほぼ出尽くしたように近いような状態だろうと思っております。中村先生からのコメントございましたが、伊藤先生から理論的に筋が通るよというコメントは唯一引っかかる場所だと思っております。

その意味でいうと、この方向性案の、3番目のポイントの生産性向上の見込みがないというところですね。X値をゼロとすることについて生産性向上がないと判断することについて、現実的なことと符合するような理屈として成り立てばいいかと思います。

今回のPSTNとしてのキャップの計測という観点で言いますと、シスコシステムズの電話交換機が既に市場にはもうないということでマイグレが予定されているわけでありまして、設備的に生産性が向上する余地というのはもう既にはないわけですし、残るは人件費の削減ということになると。生産性向上見込額の算定というのは現実を見てきたときには、X値はゼロということについてはPSTNの世界では、そうそう無理のない話ではないかという気がいたしております。

当初私はCPI連動、 $X = CPI$ ならそれでも構わないと思っていたわけですがけれども、賃上げを反映して値上げをも許容する余地もあるかと日和ったわけです。少なくとも値上げの可能性の芽を摘んでしまう規制当局側からのメッセージは現在の労働市場関係の中でいうと余り望ましいものではないこと。

それからもう1点は、値上げの方向を考えたとしても現状でPSTNの価格帯をいじれるかという事実上、値上げができない環境にあると。可能性としての道を開いたとしても、現実的に値上げの可能性はほとんどないことを考えると、X値の生産性がゼロということについて、交換機が市場に存在しない状況ですとか、人件費の削減ということについてはもう限界に達している点辺りを考慮すると、X値をゼロとすることについてのそれなりの説明がつくような印象を持っております。

#### 【辻座長】

確かにおっしゃるように、PSTNというのがだんだん減少して固定通信の通話量が減っていております。そういう意味で、今おっしゃったようにX値をゼロとすることについて、厳密な理論的な根拠はないですけれども、説得性というのはあるような気がいたします。

#### 【伊藤構成員】

私も事務局が取りまとめてくださった方向性案に賛成というのが基本的なところでございまして、私の前に中村先生と関口先生からも御発言いただきまして、核心を突いた御説明を頂戴したのではないかと感じております。

私、前回プライスカップ規制というものを使っていることの意義が最後まできちんと担保されないといけないとすれば、X=ゼロと固定してしまうことの説明がどのようにつけられるのでしょうかというこだわりから、案①のほうが説明はしやすいようなことを申し上げたのですけれども、現実を振り返ってみると、特に直前の関口先生のお話もありましたように、PSTNって狭い世界に限って言えば生産性が上がらないというよりは、稼働していないと言ったらおかしいですけれども、物的な生産性というよりも事実上、あるけれどもあまり使われなくなってしまったところで生産性が実質的には下がっているみたいなお話になるのかと思います。

もっと極言すると、ストランデッド資産化してしまっている部分を、だからといってこれなしにしようというわけにはいかないわけで、どうやって費用を回収していくかというところで非常に悩ましい問題が出ているところかと思いますが、現実的に対処をしていく上で、Xというのは生産性向上の見込み率という線を保っていくとすれば見通しが立てにくいし、PSTNという狭い世界に限って言えば顕著にプラスということはどういう角度から見ても推論しにくいのだという理由も立つということで、あとは現実的に事業者さん

の御事情とかも加味して若干のプラスの選択、中村先生のような説明の仕方というのも大変合理的な方法論かとは思いますが。

前回と逆のようなことを言うような印象を与えると大変申し訳ないですけども、現実的な選択として本当に一民間事業者さんであるNTTさんに、もしこのプライスカップ規制の存在理由というのがどんどん社会政策的ニュアンスが強まってきているところから、究極のところでは値上げをその都度、都合よくできないような縛りをかけさせていただくことだとすると、ほかの方策との今後というようなことも本来であればあり得る話かと思うのですけれども。

ただ法律制度の裏づけが必要でそう簡単には変えられないとかという現実問題もありますので、前回座長が取りまとめてくださったように案①と案②の間に落としどころをどう求めるかに最後は尽きるんだろうとは思いますが。独自にいいアイデアが全然出せなくて申し訳ないのですけれども、私の前に御発言くださった両先生の説明で、事務局の取りまとめ案と整合的な説明がつくのではないかと考えております。

これが私の考えですけど、あと一つ、CPI-Xというんですけども、考えてみればCPIのもともとの意味って何だったろうなということも、ここでまた風呂敷広げて大きな議論しても消耗になってしまうのでいけないのですけれども、いずれというか宿題として意味を考えると、これは事業者さんのコストのプロキシという解釈も一つあるかと思えます。CPIそのものの中には、総合で見ると食料とかエネルギーとか何らかの要因で大きく振れたりすることもこのたびのようにあるわけですし、これに振り回されてしまうような部分もあるとすると、少し宿題というか、内々にCPIの中身ってコアなのか、コアコアが本来は適当だったのかみたいな検討もしておいたほうが、理論武装という意味では良かったのかというようなこともぼんやりと考えております。

事務局がまとめてくださった案に賛成で、そのような形、具体的に細かい計算をしてXを出すやり方でなく、どうやって説明するんだという点については中村先生、関口先生がおっしゃってくださったような説明の仕方は大いにあり得るかというのが私の意見でございます。

#### 【辻座長】

X値の考え方について理論的に精緻に出すというのもありますけれども、今、3人の方が言われましたように社会的な意味とか、そういうようなものを入れますと、それを背景にして想定することも可能ということで、それは御賛同いただいたと思っております。

あと最後にC P Iの意味です。確かに御指摘のとおりで、いろいろなものが入った、あくまで総合的になりますが、それが電気通信というサービスの中だけの科学的なベンチマークになるかどうかは、古くから議論なっておりますので、またそれは機会がありましたら検討するのもいいかと思えます。

**【山内座長代理】**

前回、私が発言したとおりでして、皆さんの御意見あるとおりで事務局の提案でよろしいかと思えます。技術的にいろいろ変化する時代でありまして、一方でまたマイグレでいろいろ投資はあるわけだけど、一定程度は事業者の判断というところもあるわけですから、その辺については事業者で負担していただくことも必要だということで、事務局の御提案で結構だと思っております。

**【長田構成員】**

先生方も御賛同されているということで、私も方向性の案でいいのではないかと思っております。何よりも非常に世の中が技術も、それから世の中もいろいろ変わってきた大きな変革の中で、今後どうしていくべきかというのを改めて考えなくてはいけない、その狭間の時期ということですので、極力負担は抑えつつも納得性のある方向性を出していただけているんじゃないかと思いました。

**【辻座長】**

そうしたら今、構成員の皆様の御意見を伺いましたが、おおむね今回御提案の方向性ということで納得していただいたように思います。これと関連する様々な課題は全て解決しているわけではありませんが、取りあえずX値をゼロとして扱っていく方向では、これでは皆さん方の御賛同を得たような気がいたします。

次回以降につきましては、それぞれ委員の方々がいろいろな考え方等を言っていただきました。今回はこういうような特殊事情がありますので、データの収集等につきましては、これは非常に難しいと思えますが、またいろいろな手法を開発するなり、探してみるなり、できることをやっていきたいと思っております。

それでは今日は再度の議論ということで、また丁々発止する意見もありませんので、こ

の6ページの方向性案ということで御了解をお願いしたということで、今回の議論を終了したいと思います。

<次回について>

**【辻座長】**

それでは次回以降の予定につきまして、事務局から御説明をお願いしますでしょうか。

**【浅川料金サービス課課長補佐】**

本日、御議論もいただきましたので、次回でこれまでの中間取りまとめ含めて報告書案を作成させていただきたいと考えております。今回の議論も今日の議論を踏まえまして書きぶり等また精査させていただきたいと思いますので、御相談させていただきたいと思えます。次回の会合につきましては後日、事務局より御連絡差し上げます。

**【辻座長】**

それでは短時間でありましたけども、これをもちまして第4回会合を終了としたいと思います。本日はどうもありがとうございました。これにて失礼いたします。